

おでんとSDGs

静岡市は不思議な町である。家康ゆかりの駿府城跡を中核として「歴史文化のまちづくり」を総合計画の柱としながら、その中心街で最もにぎわいを見せるのは、秋の「大道芸」。お

茶、ミカン、サクラエビなどの特産品がいっぱいあるのに、全国や世界からの観光客の気は黒はんぺんなどを串に刺した「静岡（しぞう）かおでん」である。「エス・ディー・ジーズ」



静岡市の「食」を代表するおでん。静岡市葵区、全日写連・梅原邦隆さん撮影

である。「それって何?」と思う方も多いのではない。ちなみに昨年10月、静岡市が市内に住む20代から30代の女性92人にアンケートしたところ「知っている」と答えた人は2%（2人）に過ぎなかった。

それがなぜ、赤暖簾で話題になっているのか。それは、田辺信宏市長が5月31日にニューヨークの国連本部でSDGsへの取り組みについてスピーチすることが決まったからだ。

「SDGs」とは、2015年9月に国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals)の略称で、世界が目指すべき17の目標と169のターゲットから構成された国連版の「総合計画」である。

日本でも各自治体が地方創生事業などに取り組みよう求められ、静岡市ではいち早く18年度から市の総合計画の中にSDGsを組み込む作業に着手している。例えば、自主防災への取り組みは17目標の11（住み続けられる街づくり）、少年サッカー振興は4（質の高い教育）に、呼応している。

市民がこの地に生まれ、住んでよかったと思える「まちづくり」の実態がそのままSDGsに重なる。市長はおでん屋街のある町から、そう世界に発信しようとしている。

（前静岡県監査委員・富永久雄）